

第5回卒業証書授与式 校長式辞

神戸大学附属中等教育学校
校長 藤田 裕嗣

5回生の皆さん、御卒業おめでとうございます。この佳き日に、一言、お喜びと激励とお願いを申し上げます。

皆さんとは1年数か月前にオーストラリア・ケアンズを訪れた修学旅行で、数日間、行動を共にしました。ケアンズ最後の1日では、現地で学ぶ大学生とケアンズの巡検を楽しみ、生の英語にも触れたと思います。尤も、オーストラリアで話されている英語は、訛りがややきつくて、かつての宗主国であるUnited Kingdom, いわゆるイギリスで正統の、Queen's Englishとは違うのですが。

皆さんの中には、既に進学する大学も決まった、ないしは、国公立大学については、前期日程入試も終わった現時点で、合格に自信がある、という人も、いるでしょう。

大学に進学したら、皆さんが学ぶ学問は、人それぞれ。今まで仲の良かった友人とも、今後は違う学びをされるでしょう。これは、今までの「中等教育」を「卒業」して、「高等教育」を受ける、ということです。それでも、外国の大学に進学する、という人を除けば、皆さんは、学問の研鑽を積むのに、日本語で学べるであろうことは共通していると予想されます。

皆さんの中には、私は、英語を学ぶために外国語学部や国際学部等に進むのだ、という人もいるでしょうが、学ぶ対象の英語自体は、もちろん日本語ではないとは言え、日本語を介して英語を学ぶ訳で、それも含めて、私は学問を学ぶのに、「日本語で学べる」と表現しました。

そんなこと、当たり前ではないか、と諸君らは感じるかも知れません。実際に、今まで「中等教育」学校で受けた教育システムと、さほど変わらないのも、事実です。

では、約150年前、明治維新直後の東京大学でも、「学問の研鑽を積むのに、日本語で学べ」たのでしょうか？それは、違います。その当時では、英語などヨーロッパの言葉を使うことが重要でした。学問で使うべき言葉が、日本語では表現できなかつたから、です。お雇い外国人も活躍しました。

私が専門としている「地理学」の場合、「地理」という言葉自体、中国の古典である『周易』に既に出ており、中国語由来です。「地理」では、私がお説明したいことが、ややずれてしまうので、ここでは、学問の根本とされる「哲学」で説明します。

「哲学」の「哲」の漢字＝中国語は、日本人の名前にも使われ、かしこい人、ないしは知る、という意味で、英語のPhilosophyの訳語です。誰が訳したか？中国人ではありません、西周（あまね）(1829-97)という日本人なのです。

他にも重要な範疇という言葉も、一説に彼が、英語で category の訳として当て嵌めました。「範疇」のうち、疇の字は、ここには黒板もないため、口頭で説明するのは大変に難しい。今なら「カテゴリー」と表現しても、通じます。

そして、明治維新後の日本が、アジアをリードしたのは、学問の世界でも同じで、哲学や範疇などという言葉が、中国に逆輸入されました。漢字、すなわち Chinese character で表現できたからで、韓国も同じです。

この点について私は、約 40 年前に大学に入学した直後、新書類を多読して理解し、身に付けました。今でも教養の一部になっています。我々が高等教育に進んでも、日本語をそのまま使えることは、明治以来、先輩たちの努力の上に成り立っている、ということ、理解して欲しくて、説明しました。どこまで諸君らに理解してもらえたか、判りませんが、詳細は、諸君らの自主的な読書、学習に委ねたいと思います。

これから、いつもの教室に戻って、本校での 6 年間、一緒に過ごし、励まし、互いに高まり合った友人たちと存分に交流なさって下さい。再会も期しましょう！

皆さんは、本校の卒業生で、本校にとって大事な宝です。大学に進学して、社会に出ても、本校に来てください。デジタル上でも構いません。大学生になって、本校で学んだ、このことが大いに力となった；逆に、こういう点は、大学で初めて教わって、面食らった；という体験談をお願いしたい訳です。それが、私が目指している高大連携に繋がるだろうと確信しています。進学先が神戸大学であろうと、なかろうと、構いません。神戸大学でなくとも、本校で学べた、という点は今後も続け、大学生になって初めて知った、という点で、神戸大学との協力により本校でも提供できることがあるなら、ぜひ付け加えたいと、私は考えています。

もう一度、申します。諸君らは、本校にとって、大事な宝です。卒業後も、神戸大学附属中等教育学校のさらなる発展を目指す仲間として、どうか宜しくお願い致します。

保護者の皆さま、6 年間のご協力に感謝します。本日に御臨席いただいた来賓の方に対しても、御礼を申し上げます。高いところから失礼ながら、今後とも本校の発展に御協力賜りますよう、お願いして、私の式辞を終えます。

I congratulate you all on your graduation from our school.

Thank you very much for your listening to my address.

The 1st of March, twenty-nineteen, Principal of Kobe University Secondary School

裕嗣 藤田